

## 8 重複障害のある児童生徒の教科指導の実際的研究

### 8-1 「重複障害のある児童生徒の教科指導の実際的研究」

篠山市立篠山養護学校 仁井康彦

#### はじめに

肢体不自由養護学校である本校に在籍する幼児児童生徒の状況は、医療的ケアが必要な重度重複障害がある子どもから、知的障害が主で元気に走り回る子どもまで多種多様化している。市立の養護学校であるという特性を生かし、市内に在住する障害のある子どもたちに必要な支援を行うということから、軽度発達障害があるといわれる子どもも含め、早くから総合制の養護学校としての形を整えてきていると言える。

その中で、重複障害のある児童生徒の指導にあたり特に重視していることとして、本校の学習指導に関する努力目標や教育課程編成方針からまとめると以下ようになる。

- ① 障害の状態や発達段階を的確に把握し、個に応じたきめ細かな教育実践に努める。
- ② 生活のリズムや生活習慣の形成を図り、自立への基礎的な力を育成する。
- ③ 障害に基づく種々の困難を改善・克服し、自ら生きる喜びを味わわせる。
- ④ 子どもの良さを生かし、個性の伸長と全人的な発達の促進を図る。
- ⑤ 卒業後の社会参加を展望し、生涯に亘る社会生活能力の向上に努める。

特別支援教育が進められようとしている今、市内のセンター校として、教育内容も専門的かつ総合的なアプローチが必要とされ、また個々の子どもたちの多様なニーズへのきめ細かい対応が求められているのが本校の現状であるといえる。

#### 1 研究の目的

近年、特別支援教育の推進とかわって、

LD・ADHD・高機能自閉症等の軽度発達障害の子どもが増加傾向であると聞く。これまで、通常の学級の中で見過ごされたり、適切な対応がなされなかったりしてきた子どもたちに対して、一人一人の必要に応じて指導・支援をしていく。そのための研修がさかんに行われ、文献も数多く出回るようになっていく。

一方、肢体不自由養護学校に通う子どもたちの教育については、その障害の軽減や克服といったことに、より目が向けられることが多く、例えば「身体の動き」等の自立活動を中心とした学習に重点的に取り組まれる傾向が強いように感じる。

特別支援教育は、障害のある児童生徒の視点に立って一人一人のニーズを把握して必要な教育的指導と支援を行うという考え方に基づいている。障害が重複していたり重いといわれたりする子どもたちの教育についても、生きていくために必要な力は何か、そのために、今、経験させたいことは何かということについて、改めて考えていく必要があるのではないだろうか。

本校で取り組んでいる実践から、一人一人の「生きる力」をどのようにとらえて教科指導を行うかということ、また、その教科指導が指導上有効であると考えられるのは、どの程度の発達段階くらいからかということについて考察した。

#### 2 研究の取組

重複障害のある本校在籍児童生徒のうち、教科指導を行っている例の中から、今回の研究のテーマに合うと考えられる授業を選択し、校内授業研究会や授業担当者との協議、個別の指導計画の検討等を通して研究をすすめた。対象とした授業は次の通りである。

- (1) 高等部国語科（個別授業）

生徒の現在の状況から今後必要となる「生きる力」をどのように考えて教科指導を行うかということと、コミュニケーションのために有効な機器の利用等について検討した。

## (2) 小学部音楽科（合同授業）

集団学習の中での個に応じた指導と、教科指導がより有効な学習となるための児童の状況や必要な手だて等について検討した。

## 3 研究の経過

### (1) 高等部国語（個別授業 1年女子）

#### 1) 指導計画作成にあたって

学校に対する保護者の願いとして、身体的な症状の悪化を防ぐことと、視野を広めたり自分の意思を表現したりするため、パソコン等を活用させたいという希望がある。

身体的な面での支援、つまり、症状の悪化（身体の変形等）を防ぐための身体の動きに関する学習については、学校教育を進めていく上で必要となる前提条件として、関係する医療機関との連携のもとに必要な学習を進めていくことになる。

同時に、身体的に不自由な面があるからこそ、いつでも受身になるのではなく、誰にでも自分から意思を伝えることのできる力を身につける必要がある。伝えたいことはたくさんあるし、卒業後は作業所や通所施設でたくさんの人とかかわりたいという願いがある。本生徒のこれからの様々な人とのつながりを想定したとき、本人にとって有効なコミュニケーションの方法を考え取り組んでいくことを指導の中で大切にしたいと考えた。

本生徒に対するコミュニケーションに関する指導は、今、自分がもっている力を十分に出しきり、自分の考えを表現すること、そのことが周囲の人に伝わり、何らかの影響を与えるということ、それらの経験を積んでいくこと等が中心となる。

#### 2) 指導経過と課題

1学期は、休日の過ごし方や行事等の感想を「あいうえお表」で表すことと、絵カードを使っ

たゲーム等に取り組んだ。まだ、担任との関係が十分でなかったためか、自信のある返答ができる時は次々と指さして表現できたが、自信のない時は手の動きが止まってしまい、そこから先に話が進まないことが時々あった。

2学期は、PICを使った文章表現練習や、毎日の出来事や感想を「あいうえお表」で表すこと、また、パソコンを使って自分の感想をまとめる学習に取り組んでいる。感想等については、本生徒の気持ちを考えながら返答しやすい質問内容にした。そうすることで、1学期に比べ、自分のしたことや気持ちをスムーズに表現できるようになってきている。

パソコンや入力装置については、兵庫県立総合リハビリテーションセンター等の協力を得ながら、本生徒が使いやすいシステムについて検討しながら進めている。今後は、以下のようなことを目標として取り組もうと考えている。

- ① 「あいうえお表」を使って、担任以外の教師や友達とコミュニケーションをとる。
- ② 本生徒が使いやすいパソコンや入力装置を選択し、使いこなせるようにする。
- ③ 文字入力が可能になれば、手紙を書く事やインターネットの利用へとつなげていく。

目標達成のためには、卒業までの2年あまりの時間を大切にしたい、これまで以上に見通しのある計画的な指導が必要であると考えている。その際、現在行っている合同授業の精選等により、国語科の学習時間をさらに確保することも検討したい。そして、国語科の学習を通して、卒業後の豊かな生活、余暇活動の充実等にもつながる力を身につけてさせていきたいと考えている。

ただ、現状としては、夏休み以降の身体状況の悪化により、保護者からの、その予防に対する訓練的な内容の充実を望む声が大きくなってきている。コミュニケーション確立のための国語科の学習と身体的な症状の悪化を防ぐための自立活動としての身体の学習。決して相反するべきものではないことは理解しながらも、それぞれの学習に費やす時間的なバランス等について検討していくことも大きな課題となっている。

国語科学習指導案

1 日 時 平成17年〇月〇日（〇曜日）第3校時（10：50～11：30）

2 場 所 高等部1年2組教室

3 対象生徒 Y.R

4 生徒の実態

小学校低学年では、高這いや腹這いで移動をしたり、話をしたりすることもできた。しかし、年齢と共に自分でできることが少なくなり、16歳の今では全支援の状態である。コミュニケーションについては、話すことも難しくなり、現在、発語は全く見られない。高等部に入学してからのY.Rは、毎日、たくさんの友達や教師と出会って話をしたり、一緒に勉強したりすることをとても楽しみにしている。1学期の様子を見てみると、友達や教師の言っている事はほとんど理解しており、楽しい話を聞いて、大きな声で笑う事がよくあった。休日の過ごし方を尋ねると、出かけた場所、食べた物などを『あいうえお表』で表すことができた。…以下省略

5 題 材 名 「自分の気持ちを表現しよう」

6 題材設定の理由

現在のY.Rは全支援の状態で、受け身の生活が多い。しかし、Y.R自身は何でも自分でやりたいという気持ちを持っている。また、友達や教師との会話の様子を見てみると笑顔ばかりでなく、何か言いたそうな表情をしているときがある。その時の気持ちを相手に伝える事ができたら、Y.Rの学校生活もより豊かなものになり、さらには卒業後のコミュニケーションもより広がるのではないかと考える。そこで、2学期の国語の授業の中では、毎日の出来事に対して「どんなことをしたか」「どう感じたか」などを質問し、『あいうえお表』で表すことを取り入れた。1学期後半より学習ゲームを通して興味を持ち始めたパソコンをY.Rが楽しみながら操作しやすいように工夫し、支援を最小限にして、文章を作成することを目標にこの題材を設定した。この授業を通して、自分の思いが表現できるようになり、友達に手紙を書いたり、さらにメールを送ったりすることで、Y.R自身が自分の楽しみを広げて欲しいと願っている。

…以下省略

7 長期指導目標と短期指導目標

長期指導目標 ・小学校1年生の漢字（60字）の読み書き、2年生の漢字でよく使う漢字（13字）の読みができる。

・日常生活の中で自分の感じた事を『あいうえお表』を使って表現し、友達や教師とコミュニケーションがとれるようにする。

・パソコンを使って行事の感想を書いたり、漢字の学習ゲームを楽しんだりする。

短期指導目標 ・行事の後に出来事を振り返り、『あいうえお表』を使って感想をまとめる。

・パソコンを使って、行事の感想を書いたり、漢字を学習したりする。

8 指導計画（第2学期 全55時間）

第1次 『あいうえお表』で質問に答える。（3時間）

第2次 『あいうえお表』で感想を言い、パソコンでひらがなの文章を書く。（10時間）  
（本時：4時間目）

第3次 『あいうえお表』で感想を言い、パソコンで漢字を含めた文章を書く。（10時間）

第4次 パソコンで手紙を書く。（10時間）

第5次 パソコンでメールをする。（10時間）

第6次 パソコンで漢字の学習をする。（12時間）

9 本時の目標

・『あいうえお表』で感想を言う。 ・パソコンで文章を書く。

10 準備物

写真、あいうえお表、ホワイトボード、パソコン

11 展開 \*学習活動の中の□の文字は、画面上の表示を表しています。

学習活動	教師の支援	支援上の配慮点と評価
<p>1 挨拶する。 2 本時の学習内容を聞く。 3 昨日の戸外での活動を思い出す。</p> <p>4 昨日の戸外での活動の感想を『あいうえお表』を使って表す。</p> <p>5 パソコンの電源を入れる。 6 文字入力に設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">F 1</div> <p>から</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">読み込み実行</div> <p>までを順にクリックする。</p> <p>7 パソコンを使って文章を書く。 ・スキャンする文字をクリックする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「深呼吸しましょう」</li> <li>・本時の学習内容を知らせる。</li> <li>・『あいうえお表』を机の上に置く。</li> <li>・『あいうえお表』を見せる。 「昨日、どんな事をしましたか」</li> <li>・「○○をしたのですか」</li> </ul> <p>・「○○をして、どんな気持ちでしたか」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「○○の気持ちだったのですね」</li> <li>・Y.Rの意見をホワイトボードに書いて確認する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「電源を入れましょう」</li> <li>・スイッチ操作がしやすいように左手に装具をつける。 「ここでクリックしましょう」</li> <li>・フロッピーを入れる。</li> <li>・クリックする箇所を指示する。</li> <li>・打ち間違いがある時は、教師が元の状態に戻す。</li> <li>・ホワイトボードをY.Rの見やすい位置に置く。</li> <li>・打ちたい文字を読み上げる。</li> <li>・打ち間違いがある時は、教師が削除する。</li> </ul>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>声を出そうとして挨拶したか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Y.Rが見やすいように表を傾ける。</li> <li>・答えにくいようであれば、昨日の出来事の写真を見せながら話す。</li> <li>・忘れていた事があれば、その内容についても話をする。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>『あいうえお表』で自分の活動を表せたか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちが表しにくい場合は、PICのカードを使って、その時の気持ちを引き出す。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>『あいうえお』で活動の感想を表せたか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電源の位置がわからない時はその位置を知らせる。</li> <li>・クリックする様子を見ながらスイッチの位置を調整する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードは、Y.Rが見やすいように角度を調節しておく。</li> <li>・Y.Rのペースでゆっくりスイッチ操作ができるよう腕の支援を行う。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>打ちたい文字を一人で入力できたか。</p> </div>

以下省略

3) かかわりのための手段

本生徒には、人に伝えたいことや人と共有したいことがたくさんある。学校であったこと、家であったこと、テレビ番組やアイドルのこと等々。それらを、言葉で十分伝え合うことが難

しい状況ではあるが、話し言葉に変わるものを用意することでそれは可能になる。トーキングエイド・VOCA・パソコン等、人とやりとりをする道具の使用も考えられるし、50音の文字カードや絵カードを指差しで使用することも可能である。



本人の意欲から、文字を書くということについても大切に考えている。身体的な状況から、筆記用具を自分一人で操作することは難しい。書きやすい姿勢・教具、見やすい姿勢を考えながら、支援をすることになる。現在は、ひじと手首の辺りを支えることで、文字を書く動きを引き出すことができている。また、達成感や充実感をもたせるために、書いた内容を本人とともに十分に膨らませるようにしている。

コミュニケーション支援については、本人の主体性をいかにスムーズに引き出すかがポイントとなる。それまでの内容から次の動きや操作がある程度予想される場合でも、本人の主体性を尊重する。同時に、それにかかる時間的なこと（コミュニケーションとしてのスピード）についても考慮した支援が必要となる。本人の主体性と、担任の意図や思いとのバランスが重要になる。

本人の意欲に基づいた周囲の人とのコミュニケーションを、いかにあたりまえに、スムーズに行うことができるように環境を整えるかということを中心に考えた指導支援をこれからも続けていこうと考えている。

## (2) 小学部音楽（合同授業）

### 1) 小学部音楽科授業について

#### 指導略事例（5年 S児の場合）

- ・ 単元名 「みんなでリズムをたのしもう」
- ・ 本時の目標 落ち着いた気持ちでリズム遊び等（体を動かす、音をならす）を楽しむ。

学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 はじめのあいさつをする。 「たのしいおんがくはじめよう」を歌い、呼名に応える。	・ 自分の場所ではじめのあいさつができるようにことばかけをし、席に戻るまで待つ。
2 「かえるのうた」「たなばたさま」 「かたつむり」「こいぬのビンゴ」を歌う。	・ S児が歌詞をめくりに行くなど他の児童の迷惑になる行動をするときは、座るよう促す。
3 「ひげじいさん」「だいへんしんのうた」の曲にあわせてからだを動かす。	・ S児の動きや曲に合わせて、一緒に手拍子を打ったり、身体を動かしたりする。
4 器楽「おもちゃのチャチャチャ」で好きな楽器を選んで鳴らす。	・ マラカス、すずから好きな楽器を選ばせる。
5 イタリア歌曲「ゆめ」のピアノ弾き語りを聞く。	・ 周囲の迷惑にならない程度で、自由に聞かせる。
6 「またね」を歌う。 おわりのあいさつをする。	・ 自分の場所でおわりのあいさつができるようにことばかけをし、席に戻るまで待つ。

本校小学部の音楽科の指導は、幼児児童18名（幼稚部2名含む）の集団で行っている。授業は火曜日と金曜日の週2回で、40分間の授業の中に「歌唱」「身体表現」「器楽」「鑑賞」の領域を可能な限り含むようにしている。

知的障害養護学校学習指導要領に示されている小学部の音楽科の目標や3段階にまとめられた内容をふまえた上で、障害が重いとされる児童や自閉症の児童が多いことを考慮し、授業の展開においては、次のような工夫をしている。

- ① 「楽しい音楽はじめよう」「またね」の2曲で、授業の始まりと終わりを感じさせる。
- ② 授業の流れ（曲目等）をパターン化し、1～2ヶ月続ける。
- ③ 曲はできるだけ短いものを使用する。また、興味・関心をもちやすいよう、子どもたちの好きなキャラクターの名前の入った歌を取り入れる。
- ④ 歌詞カードは曲の順にまとめて貼り、曲の始めと終わりが分かるようにする。
- ⑤ 小さな一人用のマットを人数分用意し、座る場所を明確にする。

授業内容等については、音楽科指導担当者が主となり計画している。事前に各担任との打合わせ

を行っているが、授業の展開の中で子どもたち一人一人の実態に即応した指導は、担任に委ねている。細かな部分での対応等については十分打合わせができていないのが現状で、今後の課題であると考えている。

## 2) 音楽療法の視点から

小学部の音楽科授業においては、「音楽教育の中に音楽療法も取り入れる」という視点にたって、音楽的に内容豊かな授業になるように心がけながら実践を展開している。ここで述べる音楽療法とは、「発達を援助する活動として、心身がよりよい状態に向かうようにする」という定義に基づいている。

また、それに基づく子どもたちに対する「呼びかけ」や「歌いかけ」については、以下のように考えている。ピアノ・歌（「呼びかけ」・「歌いかけ」）を担当する者はセラピストの立場となり、子どもはクライアントという立場になる。セラピストが「呼びかけ」や「歌いかけ」をすることにより、それを受けた子どもは、自分の名前を言ってもらえた喜び、あるいは心地の良い音楽に包まれた安心感等々、セラピストとともに温かい一体感を感じるのである。更には、気持ちが通じ合えたと思える瞬間の小さな感動や大きな感動の積み重ねが両者の相互の関係を深め、とても意味のある空間を創り出すと言える。

集団学習の中においても、少しでも一人一人にスポットライトをあて、たとえ短い時間でも様々な効果をあげていきたいと考えている。

## 3) 児童の実態と指導経過

今回の事例となる対象児童は小学5年生の女子で、知的発達遅滞があり歩行も不安定なため外出

時等に車椅子を使用している。言語理解1歳程度で発語レベルは10ヶ月（声のバリエーションは無い）。限られたものしか興味を示さず、こだわりがあり満たされないと泣いて怒ることが多い。指導計画を立てるにあたっては、次のことに留意した。

- ① 興味の対象が限られているため、音楽や本、動くものなど興味のあることを活用できる機会を多くした。
- ② 嫌なこと、気に入らないことがあれば、すぐに癇癢を起こすので、情緒の安定をはかることを最優先にした。

音楽室へのスムーズな移動、担任以外の教師との積極的なかわりが可能になってきていることから、音楽科の授業の、学習時間・内容・集団等が、本児にとって十分に配慮され適切なものとなっていると考えられる。小さな一人用のマットとそのそばにいる担任によって本児にとって安心できる基地が確保され、安心して音楽活動に参加することができていることも大きな要因である。

授業中には、席を離れて音楽を楽しんでいる行為を、周囲の人が見て喜んだり拍手をしたりすることを意識しているようで、それを繰り返すようになってきている。また、同じように周囲を意識したような行動をする他児のまねをすることも増えてきている。これは、自分から進んでみんなを見渡せる位置に移動して座るなど、相手を意識した動きが見られるようになったこととも関連があり、ほめられる行動ということ意識できるようになってきたということである。

このような状況から、これまではどちらかとい

表1 「音楽科指導計画と経過」(1学期)

目 標	みんなと一緒に音楽を聴きながら楽しむ。
指導内容	リズムに合わせて身体を動かす。 色々な楽器を触って、音を鳴らす。
経 過	「楽しい音楽はじめよう」を歌うと、スムーズに音楽室へ移動することができるようになった。始め、終わりのあいさつは声かけにより、自分の席で行うことができた。音楽の時間すべてにおいて笑顔で参加でき、曲に合わせて身体を揺らしたり、立ち上がって回ったり全身で楽しむ様子が見られた。担任以外の教師とも自分からかわりを持ち、積極的に授業に参加できた。

えば本児の自主的な動きを重視していた指導から、指導者の積極的な介入を通しての指導が可能になってくるのではないかと考えている。例えば、うしろから手をそえて好ましい動きを作り出す支援等が可能で、しかも効果的な指導になるかもしれないということである。

以上のようなことから、2学期は指導内容として次のことを設定して取り組んだ。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 先生や友だちの動作を模倣しながら音楽に合わせて身体を動かす。</li><li>② 色々な音の鳴らし方を体験する。</li></ol> |
|--|

このとき、本児の自主的な動きと指導者の意図的な働きかけの力加減というようなことについて十分にそのバランスを見極めながら取り組んでいくことが必要となる。音楽を楽しむ自主的な動きを尊重しながらも、「でも、こんな動きもあるよ」とか「みんな、こうしているよ」というような働きかけを、これまでより明確に行っていった。

2学期終了時点での評価は以下の通りである。

音楽会では、教師の模倣を通して自分から鈴の演奏をしたり、ピアノに合わせてお辞儀をすることができた。また、担任の支援のもとに、立ったままで体を揺らしたりしながら音楽を楽しむ様子も見られた。授業においては、曲が変わると自分から歌詞をめくりに行ったり、教師がホワイトボードに書く場面ではマジックを手渡したり、授業の展開を理解した行動が見られた。手遊び歌では体を揺らしながら音楽を楽しむことが中心となり、模倣する様子は見られなかった。

今後、全体としては、音楽療法的な視点からの、比較的高い声（ソプラノ）での呼びかけや歌いかけが、児童にどのように効果的に作用しているのかということについても、実践を通して考えていきたい。合わせて、授業の最終場面での、例えば、イタリア歌曲「ゆめ」のピアノ弾き語りを聞いている児童の表情から想像できる、本物・実物のもつ効果的な教育作用についても同様に実践を通して考えながら、子どもたちが心から楽しみ、自己表現できるような、そして、精神的安定を高めるような音楽の授業をこれからも創造していきたいと考えている。

## 4 考 察

### (1) 「教科の学習」

「教科の学習」は、「文化・科学・社会あるいは自然の持っている体系と、子どもの発達との接点を、順序性・系統性・計画性を持って、子どもに経験させ、力を身につけ、発揮させていくもの」ということができる。このような「教科の学習」を通して、子どもたちは様々な能力を獲得していくことになる。「教科の学習」が、人間にとって必要なものであり、子どもが学習し発達していくために欠かすことができないからこそ、学校教育として行うことになっている。

高等部国語科の指導事例（3の(1)の例）の生徒の、出身中学校からの引継ぎ事項としては「障害の進行をできる限り遅らせるための身体の動きに関する指導を重視した取組を行ってきた」とあり、国語・数学といった学習についての詳しい引継ぎは特になかった。

一人一人のニーズを把握して必要な教育的支援を行うという考え方に基づく特別支援教育において、障害があるために生じる不自由さということのみ重視し、対応しようとすることがないようしていきたいと考える。例えば発達検査が必要な場合があり、そこから発達課題が明確になる場合がある。しかし、そのことがそのまま学校での教育目標になることはない。もちろん、例えば、身体的な動きに課題がある場合は医療的な機関とも連携をとりながらそのことに学校でも取り組む必要がある。しかし、その場合、身体的な動きについて学習し改善していくことが、その子どもにとってどのような意味をもつのかを考えなければならない。それは、自分の周りの人や環境との関係のなかで検討されるべきものである。どのような内容を、どういう方法で、何のために、いつ、どこで、誰と経験させ学ばせるのか。そういうことを計画立案し、実践する。その中で子どもが楽しく活動し力を獲得していく。それが学校に求められることであり、学校教育の専門性でもあると考える。

高等部国語科の指導事例の生徒には身体的に不



自由な面があり、その進行を遅らせるための取組が必要である。ただし、それは医療機関の単なる補助ではなく、本人にとってよりよい状態で自分

の意思を表現したり周囲の人とかかわったりするためであるとする。そのことが、「生きる力」につながる。

表2 「音楽科の学習における児童の実態とその力」

児童の実態	身につけている力
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆音楽が好き</li> <li>◆音の出るもの、動くものに興味がある</li> <li>◆音楽室へのスムーズな移動が可能</li> <li>◆授業中、友達のまねをすることが増えてきている</li> <li>◆ほめられることを意識するような行動が増える</li> <li>◆本児にとっての居場所が確保され、安心して音楽活動に参加することができている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆好きなもの、興味のあるものがある</li> <li>◆見通しが持てる</li> <li>◆模倣しようとする</li> <li>◆相手を意識できる</li> <li>◆心理的に安定している</li> </ul>

これらは、発達段階ということである、例えば次の表のようなところにあてはめて考えることができる。

表3 「乳児期後半における発達の検討表」

	10ヶ月頃	11ヶ月頃
全体的特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志向的活動の中に定位的調整が見られてくる</li> <li>・目標に向かって移動や訴えをする</li> <li>・自分を発見する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標をつぎつぎに再生産する</li> <li>・定位的活動がふえてくる</li> <li>・自分の力で食べようとする</li> <li>・外界とのあいだに3つめの連結点をつくって外界をとりいれる</li> </ul>
運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四つばいやつたい歩きをし、目標に到達し、さらにつぎにすすむ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つたい歩きをし、つかまり立ちから手をはなす</li> </ul>
手指	<ul style="list-style-type: none"> <li>・器の中にまねてものをいれかける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・容器にもものをつづけて入れる、かぶせる、のせる、あわせるなど定位活動をする</li> <li>・なぐりがきができるはじめる</li> </ul>
音声	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の名前を呼ばれてわかる</li> <li>・要求の手さし、指さしをする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理解語がふえてくる</li> </ul>
情動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鏡の中の自分をのぞきこみ、かつ他をさがす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手にだけでなく、相手のしていることに興味をしめし、自分でもやろうとする</li> </ul>
社会性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両手のものをうちあわせるなど、ものをつかっただけの身振り模倣がふえてくる</li> <li>・ほめてもらうとくりかえす</li> <li>・「ちょうだい」にたいして、相手にものをさしだしはじめる</li> <li>・相手とのあいだで第3者を共有しはじめる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の子どもがもっているものに手をだす</li> <li>・相手にものをわたす</li> <li>・言葉で模倣をひきだすことができる</li> <li>・つもり行動がめばえる</li> </ul>

田中昌人／田中杉恵「子どもの発達と診断」2乳児期後半 大月書店より抜粋



コミュニケーションに関する指導は学校教育全体を通して行われるものであるが、本生徒には経験したことや知らせたいことを相手に応じてわかるように伝えるという具体的な目標があり、文字の読み書きができ（支援は必要）、コミュニケーションの意欲も十分にあることから、国語科における重点的な指導が今後も必要であり有効であると考えている。

## (2) 「教科の学習」を意識した取組

知的障害養護学校学習指導要領では、小学部の音楽科の1段階の内容として「音楽が流れている中で体を動かして楽しむ」と「音の出るおもちゃで遊んだり、扱いやすい打楽器でいろいろな音を鳴らしたりして楽しむ」ことが示されている。このような内容を指導することが可能であると考えられる児童生徒の状況や必要な手だてはどのようなものかについて考えてみたい。

小学部音楽科の指導事例（3の(2)の例）での児童の状況は、次のようにまとめることができる。

これらを参考に、一般に乳児期後半と言われる発達段階で身につける力で、「教科の学習」を進めるにあたって関連する必要な力としては以下のように考えることができるのではないだろうか。

- ① 教材や教具に対して興味を示し、目的をともなって選択したり使用したりすること。
- ② 相手の心への期待のもとに自分からしてみせるような、コミュニケーションの意欲。
- ③ 身振りの模倣が増え、言葉でも模倣を引き出すことができること。
- ④ 自分でできる喜びを味わい、次の楽しいことのためにがんばる見通しの力をもつこと。
- ⑤ 親しい人との関係を基本にした第三者の共有や、集団の中でも安定して過ごせること。

教科の種類や題材等によって必要とする力は変わってくると思われるが、以上のような力を身に付け始めるころ、「教科の学習」を意識した順序性・系統性・計画性のある学習に取り組んでいくことを検討することが可能になってくるのではない

いかと考える。

## (3) 「生きる力」

学校教育で身につけさせたい力は、「生きる力」である。人は社会との密接な関係の中で生きていくということを考えると、それは例えば、周囲の人とのよりよい関係を構築することであったり、生活に有効な道具等を使って便利な生活を送ることであったり、様々な自然や文化を豊かに味わったりすることである。

それらを、系統的・発展的に子どもに経験させたり、そのような力を身につけさせたり発揮させたりするための方法・手段として「教科の学習」をとらえる必要がある。

ここでは、個別学習での「国語」と集団学習での「音楽」を取り上げた。周囲の人とのコミュニケーションの充実にむけて有効な方法を開拓し技術の向上をはかること。音楽そのものを楽しみ、さらに好きな音楽を通して周囲の人との良好な関係を構築すること。これらは、まさに障害のある本校児童生徒の「生きる力」につながるものである。

障害のある児童生徒の「生きる力」をどのようにとらえ、指導支援していくか。一人一人の児童生徒に必要なでありかつ適切な「教科の学習」について、本校においてもその充実に向けてのさらなる取組が必要であると考えている。

## 5 おわりに

障害のある児童生徒一人一人のニーズを把握した必要な教育的支援としての「教科の学習」について本校での実践をもとに考えてきた。

障害があるために何らかの不自由さがあり、そのことへのより適切な対応を期待して養護学校が選択される。そして、自立活動を主としてそのために必要な学習を行う。発達検査等によって発達課題が明らかになり、それに基づいて計画的に学習が進められる。

一方、個々には適切な指導支援が行われていても、年度ごとの関連や発展性のある長期的な計画の下に進められていると言い切れないのが「教科

の学習」であるように感じる。

「生きる力」を身につけていくために必要な「教科の学習」について、下学年代替や知的障害養護学校の教科との代替も含めて、長期的な見通しを持った指導計画の作成とそれに基づく指導が今後の大きな課題となると考えている。あわせて、ここでは触れることのできなかつた評価の仕方についても、学校としての共通理解のもとに検討を進めていく必要がある。

篠山市立篠山養護学校 仁井 康彦  
協力 山中真由美 小石川久美子  
山中佐恵子 倉垣 尚恵

#### 引用参考文献

- ① 文部省（2000）「盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（平成11年3月）解説－各教科、道徳及び特別活動編－」
- ② 河添邦俊（1984）「障害児指導のみちすじ」p40 ミネルヴァ書房
- ③ 田中昌人 田中杉恵（1982）「子どもの発達と診断」2乳児期後半 p182,183 大月書店
- ④ 白石正久（1994）「発達の扉」かもがわ出版